

増上寺文化財特曝書展観

—南北朝頃の私撰集断簡と広沢切—

去る昭和五十四年十月二十六日、東京芝の増上寺で宝物の曝書展観があると新聞で知って、福田・村上の二人で見学に出かけた。

会場には、昭和五十三年に重要文化財に指定された「花園院宸翰宸記目録」や中近世の古文書、寺の古絵図、歴代住持の書いた一枚起請文、大般若経の明版や高麗版など多数の書画や典籍が展示されていたが、中で私の興味を引いたのは、私撰集の断簡と見られる一幅であった。以下に示すように全二二行、横幅凡そ一メートルの大きな幅で、断簡は天地大凡二五センチ、灰色に見える紙で南北朝・室町期の書写かと見られた。やや暗い会場に吊されているのを遠方から眺めたため、若干判読不能の文字もあるが、右兩名で判読・筆記した結果は次の如くである。番号は今回仮に付したものである。

院御製

2 秋ふかき夜をはなか□にねさめして

つきのかなしきかきりをそみる

五十番御哥合に秋朝

3 しもきえぬ野はらのあさけ□さましみ

秋ふかき花のうへそしほる、

十五番御うたあはせに

延政門院新大納言

4 なかつきのさすそをかきき秋の色は

かれてもしはしのへにふえ□む

九条左大臣女

5 野辺は霜山はしくれてものことに

うつろひかはる□□□のすま

暮秋月といふ心を

永福門院御かた

1 とめかたき秋の日かすをおもふ夜の

月たに空をいそかさらなむ

大江 宗秀

6 行あきのかたみとなりてわすれめや

きりうすき山のありあけのかけ

暮秋のうたとて

読人不知

7 しほるらん草木もいかにわ□□を

かけてしくるゝ秋のくれかた

一見して、鎌倉末ないし南北朝初期の私撰集の秋部の終近くの部分と推測され、作者の顔ぶれから見ても、京極派の色彩がまわめて濃い。

ただ、索引類を引いてみても、今のところこれが何という集の断簡であるか、目下のところ不明である。

1の作者名表記から見て、勅撰集の断簡でないことは明らかと思うが、念のために国歌大観（正篇）で当たっても、このような本文を有する勅撰集はなく、更に右の七首の中に勅撰集入集歌は一首もない。

次に、続瓊葉、臨永、藤葉等の集を収める群書類従に当るべく、新校群書類従の索引を引いてみたが、そこにも該当する集は見当らなかつた。ただ、1が「永福門院百番御自歌合」五十番左に見えることを知り得たが、他の六首は右の索引にも、従って群書類従正篇にも、見えぬ歌のようである。また、続群書類従にも、右のような部分を持つ集は見当らず、「夫木抄」にも右の七首は見出されない。その他、「私家集大成中世Ⅲ」をはじめ手許の心当りの歌書をいくつか探索してみたが、右以上の事実は知られず、2・3の作者「院」も、恐らく伏見院であろうと思うもの

の、3・4の詞書に見える各歌合とともに、今は実体を確かめることができない。

その曝書展観では、この他に「伊勢物語最大秘伝和歌知願集」序・巻一ならびに巻二の二軸、江戸初写」と広沢切一軸とが注意を引いた。特に後者は、

恋□□

せめてその人のゆかりの人よりも／なをなつかしみたくにやはおもふ

恋しともうしともはたきたためかたみ／こころに人のつるにかゝるを以下、待恋・不逢恋・恨恋・忘恋の各一首と「恋」とのみ詞書する五首の、計二一首を記した一軸であった。恐らく既に知られているものと思つてよくメモして来なかつたが、私家集大成にも「伏見天皇御製集」や「二松学舎大学論集」に載つたその増補にも見当らず、どうやら新出の一軸であつたらしい。

増上寺では目下典籍目録を編集中で、数年後にそれが完成したら閲覧も可能になるようであるから、右の資料はその曉に再び詳しく調査したいと思うが、今は取敢えず二つの新出資料の本文もしくはその一部を報告しておく。

（第二室 福田秀一）